

超高品質なホコリ展—ホコリはいかにしてハイ・クオリティーを獲得するに至ったか

報告：岩崎貴宏

超高品質なホコリ展

—ホコリはいかにしてハイ・クオリティーを獲得するに至ったか
岩崎貴宏

2006年3月、大井健次教授から広島市吉島にある、旧ゴミ処理場の視察に同行しないかという話をいただいた。戦後日本経済が発展を遂げる影で、大量のゴミを処理し続けた工場が、老朽化のため今度はその頑丈な体躯そのものが、巨大な廃棄物になっている建物である。視察目的は、工場を表現活動の場として再利用出来ないか検討することであった。



視察時の旧中工場プラットフォーム

視察の最後に見せてもらった1階プラットフォームは、ゴミ処理場独特の力強さと非日常的なインパクトを誇示していた。ダン・フレイヴィン作品(註1)の如く、壁面に設置された蛍光灯によって照らされた工場内部は、四方黄色で塗られた仕切り壁、5番までナンバリングされた重厚なハッチ、天井にはバロック的細部の如く縦横に走る配管や、換気ダクトが剥き出しのまま延びていた。空間に、窓も柱も全く持たないせいか、一つの天蓋に覆われたような印象があった。また出入口に向けて身体に帯びる僅かな傾斜感覚は、強制的な排水を暗示させ、プラットフォームが人や物のとどまりを拒絶するような物語性を醸し出していた。意味を漂白された均質空間に住み慣れている筆者は、ホコリの臭気が充満した廃墟の雰囲気か漂う工場内で、日常では味わえない感覚に興奮した。

同年7月、筆者は旧中工場アートプロジェクトの総合ディレクターとなった柳幸典准教授より、旧中工場プラットフォームで展覧会の企画担当を命じられた。企画の具現化にあたり、柳准教授より幾つかの条件が提案された。まず会場がかつてゴミ処理場であったことから、ゴミを素材、あるいはテーマとした作品で構成すること(註2)。次に参加作家は広島在住、もしくは広島市立大学を卒業し、発表の機会を望む若手作家でまず検討すること(註3)。また他分野でも領域横断的な活動をしている作家をリサーチし、積極的に引き込むこと。そして、旧ゴミ処理場が吉島地区に位置するため、現代アートに馴染みの薄い地域住民の方にも楽しめる展覧会にすること。最後に

上記の条件をクリアしながらも、展覧会としての質を落とさないこと。というものであった。会場、作家、観客、いずれも場を中心として必然的にリンクしており、多層的価値を認識した上で、それらを分かりやすく結合させることが求められた。

上記の提案に加え、会場となる旧中工場は、展覧会を催すには不向きな要素が見受けられた。まず前述した床面の傾斜は、大きな立体作品を設置するには不向きであり、加えて平面作品を普通に展示出来る壁面が少ない。またプラットフォームの出入口が一つのため、消防法上、一度に数名しか入場出来ない制約を持っていた。そして頭を悩ませたのが大量のスラッグの山である。このスラッグの山は全体量が日々変動するため、展示可能な床面積の決定が搬入当日まで分からなかった(註4)。



大量のスラッグの山

企画立案にあたりまず留意した点は、視察時に空間から受けた非日常性に包まれた高揚感を、いかに観客に伝えられるかである。プラットフォームの存在感だけでも鑑賞する価値があったし、こけら落としとなる展覧会で、空間を遡ってまで作品を展示することに違和感があった。そこで空間と作品の対決を見せるのではなく、共生への模索こそが新しい表現の価値観を提示出来ると考えた。以上を考慮して出した骨子案は、出品作品は工場空間に対して極端に小さすぎる、あるいは工場と同質化させて全く見せない、そのため初見では工場の空間しか頭在化させないというものである。鑑賞者はまず、大きな工場内のどこに作品が潜んでいるのかを、注意深く時間をかけて探索し、発見する楽しみを持つことになる。その過程で、特殊空間の魅力発見も組み込まれるのではないかと考えた。

筆者の周りにいる同世代の若手作家は、些細なことや日常的に見慣れたものに、少し手を加えることで作品化する傾向が見られる。筆者自身が作る作品も、大抵サイズが小さい上、シャーペンの芯で制作した作品は「美術館の保存修復係には最高の悪夢である」(註5)と美術雑誌で評されたように華奢で壊れやすいものが多い。主催側は、鑑賞者によって作品が壊されることを、最も憂慮する。そのためロープ等により、あらかじめ作品への接近を遮ることになるのだ

が、その遮蔽物の存在感が勝ってしまい、作品の繊細な雰囲気壊してしまふ。しかし今回の展示では消防法の制約により、入場は交代制による少人数のみの鑑賞形式をとったため、火災時の誘導員兼案内スタッフの数名で作品の保護が容易となった。そのため破損しやすい作品も、境界物を付けないうまで展示を行なうことが出来た。会場の負の要素の多くは、結果として参加作家の極小かつ繊細なインスタレーションを、ベストに近い状態で見せる展示形式と上手く合致した(註6)。



シャーペン芯の作品
岩崎貴宏《ディファレンシャルインテグラル カリキュラス》部分 2005

この展示会は、アートを見せるために用意された空間ではないことから、見せ方や展示の仕方も、既存の心地良い基準とは異なる提言が出来た。その核として考えたのが鑑賞時の姿勢と態度である。展示品は通常、鑑賞者の見やすい位置に置かれるが、もっと別の見せ方があっても良いだろう。屈んだり、見上げたり、爪先立ちで覗き込んだり、息を殺し忍び足で近寄るといった鑑賞の姿勢はどうであろうか。遥かに高い天井に吊られた作品や、地面にしゃがまなければ見えない作品といった展示を念頭に出品作品の選考・依頼をした。



作品を覗き込む観客

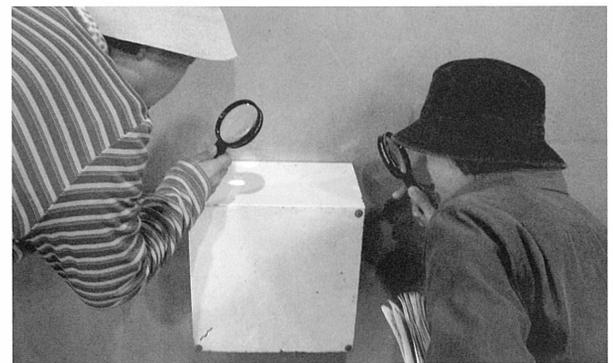


しゃがみ込んで作品を鑑賞



上空にある作品を見上げる観客

次にポイントとしたのは、鑑賞時の態度。肉眼では中々見えない状況を作ることで、鑑賞者にもっとよく見たいという欲求を起させさせる。そこで鑑賞者に虫眼鏡と双眼鏡を配ると、器具の使用を強制されている訳ではないが、大抵の場合、作品に近寄りレンズを当てじっくり観察してしまう。



虫眼鏡を使って極小の作品をじっくり見る

難解と言われる現代アート作品への理解は、まず作品をよく観察しようとする態度から始まる。この態度は、世界の事象の裏に存在している秩序や法則を発見し、未知なるものとの出会いに繋がっている。玩具であるが二種類の光学機器は、走査型電子顕微鏡や、ハッブル宇宙望遠鏡といった、マイクロ・マクロコズミックへのアプローチと同質のものである。そして、作品の情報供給となるキャプションだ

が、歴史を持つ工場の細部と、そこで呼吸し始めた作品との連続性を断ち切ってしまうまいよ、代わりに会場マップに、キャプションが付いたものを別途用意した。また現代アート初心者の方が作品を見る上で、ヒントとなるような作品解説と、制作中の写真を一緒に載せ、本として綴じた。以上の虫眼鏡と双眼鏡(註7)、会場マップを鑑賞用携行グッズとし、ゴミ袋から作った手作りバッグに入れ、出入口で来場者に貸与した。



鑑賞グッズ(バッグ、マップ、双眼鏡、虫眼鏡)



入口で来場者にバッグを配布するフタッフ



マップ+解説ブックをヒントに作品鑑賞

出品作品と鑑賞方法の決定後、会場のどこに作品を配置し、展示を立体的に構成できるかを考えていた際、黒々と強い存在感を放つスラグと、作品をどう共存させるべきかがポイントとなった。搬入時、予想を大きく裏切るほど激減していたスラグを、工場四隅から掻き集め、中央付近に富士山状の山一つ作った。その山に掛かるようにしてトム・フリードマンの雲の作品を吊り下げた。黒い山(スラグ)の上に、フリードマンの白い雲(枕の綿)が掛かり、その横を友枝望の白雨(白髪)が降り注ぐ。そして遙か上空、藤浩志の黄色い鳥(要らなくなった玩具)が滑空する。この渾然一体化した箱庭の見立ての風景が基調となり、別の場所でも、スケール感や素材、作家も違う作品同士がお互い重なり合い、予期せぬ情景を創発させた。



作品同士が重なりあう展示風景

最後になったが、旧ゴミ処理場でこの企画を考えるにあたり、来場者(特に地域の方々)に伝えたかったことは、楽しみながら、価値の転換をその肌で感じてもらうことであった(註8)。人は知的好奇心によって自ら考え、発見する喜びを持っている。ゴミだと思いこんでいたものが、作家の些細な所為によって、丸ごと反転してしまう体験を味わって欲しいと願う。ひいては、都市のブラックホールの存在であった旧ゴミ処理場が、廃棄する場から脱却し、存在価値を180度転換させ、都市における恒星的役割、新しい価値を萌芽させる文化的拠点として、再生されることを切に望む。

註1 アメリカ人アーティスト。蛍光灯を用いる作品で有名。

註2 出品作品の素材として、ホコリ、髪の毛、カビ、糸屑、雑草、昆虫の死骸、空き缶、古雑誌、靴下、紙袋、枕の詰め物、スラグなどが使用された。

註3 参加作家23組中、半数以上の14名が広島市立大学の卒業生、あるいは広島在住の作家。

註4 搬入1週間前まであった大量のスラグは、最終的にほとんど姿を消した。そこまでの減少は想定外であり、床面全域がほぼ丸出しになってしまったため、展示計画を大幅に変更しなければならなかった。

註5 John Murray, Review of "newcontemporaries 2005," *an Magazine* (August 2005), 6-7.

註6 ただし、期間中、自然の力や、人身といった不可抗力で何度も作品は壊された。その都度作家に修復してもらうことになった。

註7 配布した虫眼鏡と双眼鏡は、観察機能だけでなく、焦点距離の違いによって会場内の距離感を変異させ、作品と空間のスケール感や、サイズをシャッフルする目的がある。

註8 価値の転換というビジョンは、この旧ゴミ処理場の展示だけで完結するものではなく、吉島地域各所、旧日本銀行で開催された展覧会との相互補完によってなされるものである。総合ディレクターの柳准教授が掲げるアートセンター構想の最初の核となるものである。